

アジアのなかの島津義久・義弘

東京大学史料編纂所 准教授 黒嶋 敏 氏

はじめに

近年、戦国時代の研究が活発になり、この10年くらいの間に戦国島津氏への関心が深まった。日本の歴史の中で、九州は常にアジアの窓口として位置づけられるユニークな場所である。「アジア戦国大名」と評価される大友宗麟のように、日本という枠組みと同時にアジアという枠組みで地域権力者を捉えなおすことは、島津氏の場合も有効ではないかと思う。島津氏は、戦国時代の終わりから江戸時代の初めにかけて朱印船貿易を行った最大の大名である。今回は、島津氏のアジア諸国との関係を見ていく。そして、戦国時代末期における島津氏の複雑な当主の権限について、外国との関わりの中から、島津義久、義弘、忠恒(1606年より家久)の3人を見ていく。

島津義久・義弘の外交

1570～1610年代という時期は、明がアジア世界に対する影響力を失っていく時期にあたる。明の海禁政策が緩和されたことで、南シナ海では活発な経済活動が展開し、アジアの巨大市場に発展した。南蛮貿易や朱印船貿易の主な舞台も、南シナ海であった。日本からの主な交易品は銀、中国からは生糸や硝石(火薬の原料)で、これらを取引した。

さて、島津氏のアジア交易を三つの時期に分けて見ていくと、①戦国大名期(1570～87年)は、島津氏当主の外交権は義久が掌握していた。漂着船を保護したり、海賊行為の取締りを行ったり、山川をはじめとした主要な港を自分の直轄地として取り込んだ。義久は琉球との関係を重視し、家督相続を祝う琉球からの「あや船」を当主権威の象徴と捉えていた。この時期の島津氏は、非常に早いスピードで領国を拡大させており、その勢力拡大に伴い、琉球に対してだんだん高圧的に接するようになっていった。また、カンボジアとの通交にも参入している。

②豊臣大名期(1587～98年)になると、豊臣政権から義弘が当主として扱われ、島津氏には琉球使節の派遣の調整、明国との勘合復活への調整、倭寇船の取締りを命じられた。義弘が公的な当主として扱われる一方、外交問題に関しては、義久が前面に出て担当しており、対外関係の実権は義久が握っていたと考えられる。文禄の役の時期、義弘は嫡男の久保と朝鮮に渡海し、久保の病死後は忠恒も朝鮮に渡った。その間、義久が琉球や福建方面との通交を行っていた。この時期も基本的に外交関係は義久が掌握していたが、慶長の役の頃になると、石田三成と結んだ伊集院幸侃が琉球通交に関与するようになった。

③徳川大名期(1599～1611年)、島津家は義久、義弘、忠恒の「三殿」がそれぞれ外交に関与するようになる。1609年の琉球出兵までは義久が琉球通交を掌握し続けるが、この時期になって義弘の外交の動きが増えていく。義弘は、政権を進める「ばはん」(倭寇)の禁止を命じたり、フィリピンのルソン交易を独自に進めたりしている。また、忠恒を指導して領内に唐船奉行を設置している。忠恒は、幕府の外交統制に従って、長崎奉行に協力したり、将軍家の発行する異国渡海朱印状の受給に尽力したりしている。このように、この時期は、「三殿」それぞれが外交を自分の力で展開する状況が見られる。琉球に関しては、琉球出兵を機に義久から家久の手に移る。家久は、義久や義弘のもつ外交権を自分の手許に再編していこうとするが、幕府の統制が強まり、独自の権限を幕府に奪われるかたちで低下させていった。

旗に見る異国との付き合い

ここからは、旗を切り口に島津氏の外交を見ていく。
事例1:1593年頃、トカラ列島に漂着した唐舟に義久が御旗を



与え、後に唐舟は義久を頼って再来日し、翌々年には義久を通じて秀吉に拝謁。

事例2:1598年、五島に着いた唐人が伏見に上り、義久から御旗を拝領。その返礼として翌年、明の福建巡撫の金学曾が使者を薩摩に派遣。しかし、船は途中で海賊に襲われ、たまたまマルソン周辺に放置された2人が日本に向かい、義久と義弘に報告して事件が発覚。

この二つの事例から、義久が御旗を与え、それが正当性の根拠になって、旗をもらった唐舟が再び義久を頼ってくるという流れが見える。同時代に船が旗をもらう事例として、瀬戸内海に海賊として有名な村上氏の出していた過所旗があるが、これとは異なる独自の機能があるのではないかと思う。そこで、船の旗を集めて検討してみた。

まず、長門赤間関の代官高須氏が与えた旗が残っている。これは、1584年に下関に来航した明の商人と代官の高須氏との間で交わされた旗である。高須氏は旗を2つ作り、1つを商人に渡して1つを自分の手許に置き、翌年6月に下関に来航する約束をして、約束通りに来航したら、旗を照合して商取引することになっていた。

次に、薩摩の朱印船貿易に従事した大迫氏に伝えた旗を紹介する。これは、交趾の「屋形」の旗と伝わっているもので、この旗をもって交趾に行けば便宜を図ってもらえると書かれているものである。交趾の港の現地役人が出した旗と考えられる。

この時期のアジアの海上は、いろいろな勢力が入り乱れており、ここを渡航する船は、自分の安全を確保するためにさまざまな旗を持参していた可能性が高いことが分かっている。国籍とは関係なく安全保障のために他国の旗を掲げる船の事例があり、旗は航海中の特定の局面において、見かけの船の属性を旗に象徴させて安全を手にするアイテムと考えられる。16世紀後半から17世紀初頭の混沌としたアジアの海の海上不安を反映して生まれた慣習と思われる。

このように見ていくと、先の義久の旗も、南九州の地域権力者による、見かけの属性を与えるアイテムと考えられる。史料上、旗は文書とセットに渡されることが多く、義久の名義で異国船に来航許可証のようなものを発給している可能性も見えてくる。ここには、徳川家康が発給した朱印状と旗の共通性が見られる。戦国大名の旗というと、もっぱら戦陣で使う軍旗としての関心が先立つが、船の旗についての研究が進めば、外交を担当した島津氏当主についても、新たな一面が見えてくるのではないだろうか。

おわりに

義久・義弘の時代、16世紀のアジアの海は、混沌とした時期であった。そして、日本とアジア諸国との関係も多様で複雑なものになった。日本の国内では戦国時代にあたり、地域権力者として成長してくる大名にとって、自分の領国と外国との貿易は、経済的に重要になってくる。いかに安定的に外国の船を来航させるか、そして領国を富ませていくか、そのために海上管理や統制に取り組んだ。島津氏の場合、その役割を主に義久が果たしていた。しかし、大名として勢力拡大を続けていく島津氏も、最終的に中央の為政者、天下人のもとに統合され、それぞれの政権の中で一大名として生きていくことになる。天下人は、外交に関しても管理統制を強めていき、天下人からの外交問題は義弘に課せられた。天下人の命令を受けて、国元にそれを貫徹させて、天下人の政権の中の島津氏の位置づけを探っていくのが、義弘の役割であった。陸からだけでなく、海からの視点でも、義弘・義久がもっていたユニークな側面が見えてくる。
(文責 学芸課)

イベント報告

黎明館では、外部講師を招いての講演会や、学芸講座などのほかに、小・中学生を対象とした体験講座やキッズフェスタを開催しています。今年は新型コロナウイルスの影響を受けながらも、参加人数を減らすなど対策を行い、夏休み期間に3つのイベントを開催しました。

楽しい体験講座 薩摩焼を作ろう

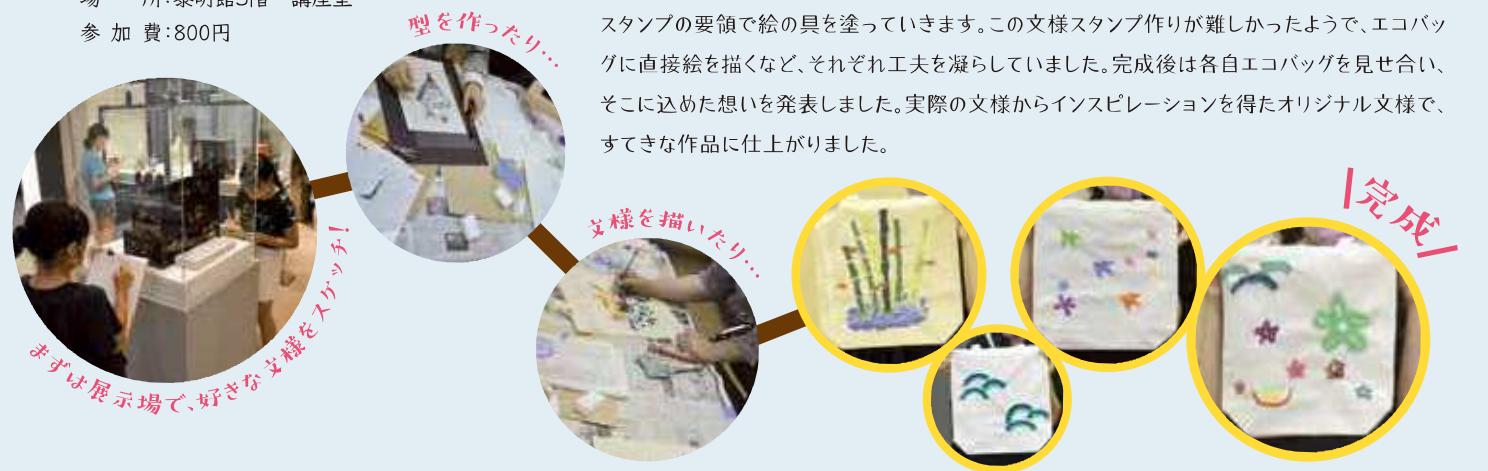
日 時:7月26日(日)10:30～/13:00～
場 所:黎明館3階 講座室
講 師:琴鳴堂 四元 誠 氏
参加費:300円



午前と午後の2部制で、小学4年生から中学生とその保護者総勢48名に参加いただきました。講師の四元先生から作り方の説明を受けた後、いよいよ製作開始。まず、粘土を好きな形に成形します。皿やティーカップ、花瓶など、粘土をこねたりくっつけたりして、形にしていきます。先生からアドバイスをもらいながら、みなさん真剣な表情で取り組んでいました。形が出来上がったら、次は着色。専用の絵の具を塗っていきます。好きな色を組み合わせたり、皿やカップに直接絵を描いたり、思い思いに装飾しました。参加者が体験するのはここまでで、後日、四元先生が焼きと仕上げの作業を行いました。個性的で、色彩豊かな、世界にひとつだけの薩摩焼が出来上がりました。

企画展関連ワークショップ 「オリジナル文様でつくるエコバッグ」

日 時:8月8日(土)13:00～
場 所:黎明館3階 講座室
参加費:800円



6月16日～8月30日まで開催していた、企画展「にほんの飾り・さつまの飾り—貴人・武士から庶民まで 飾りに込めた想いと憧れ—」の関連プログラムとしてワークショップを行いました。当日は小学生から大人まで、総勢16名に参加いただきました。まず、企画展会場を見てまわり、好きな作品をピックアップ。好きな理由や、エコバッグに描きたい文様をメモします。その後、講座室へ移動し、実際にエコバッグを製作します。クリアファイルに文様を描き、カッターで切り取り、スタンプの要領で絵の具を塗っていきます。この文様スタンプ作りが難しかったようで、エコバッグに直接絵を描くなど、それぞれ工夫を凝らしていました。完成後は各自エコバッグを見せ合い、そこに込めた想いを発表しました。実際の文様からインスピレーションを得たオリジナル文様で、すてきな作品に仕上がりました。

夏休み 黎明館キッズフェスタ 「謎解き!御楼門」

日 時:8月23日(日)10:30～
場 所:常設展示ほか
講 師:黎明館展示解説員
参加費:常設展示団体入館料

この夏のキッズフェスタは、「謎解き!御楼門」と題して、今年3月に完成した御楼門にまつわるクイズに答えながら、鹿児島城について学びました。小学生とその保護者、総勢30名に参加いただきました。展示解説員や博物館実習中の学生による解説を聞いたあと、クイズに挑戦!正解毎にオリジナルデザインのシールを貼って、ワークシートが完成しました。参加者は真剣な表情で解説を聞き、147年ぶりに復元された御楼門に、思いをはせました。



参加者には、シールつきの参加証を配布!

